

# 風土



深 大 寺 神 蔵 器

墓 訪 へ ば 柞 落 花 の 嵐 かな

春 惜 し む そ ば の 後 よ り 湯ゆと 桶とう かな

青 天 へ 紅 花 柄 や 鉾 立 す

し や ぼ ん 玉 そ れ し 一 つ は 恋 の 使 者

朴 咲 け り 地 上 に ベ ー ト ー ベ ン 第 九

朝掘りの竹の子の頭や熱からむ  
晴れながら一つとどろく春の雷  
三の丸に馬場をのこして諸葛菜  
行春や茶杓を削る草と行  
青邨ののこせしいろの花蘇坊  
井伊直弼  
戒名の二十一字臃かな  
松陰に「土規七則」あり龍の玉



# 竹間集

同人作品



水草生ふ

齊藤 小夜

菜種梅雨大和に友を見失なふ  
春一番きのふに今日の寒さかな  
三極の花や手抜きの掃除して  
明るさは増え来るものよ入彼岸  
水草生ふ伏流水に日のひかり  
しづかかな桜大樹の下にゐて  
花の闇重し八十路へあゆみ入る

啓 蟄

徳丸 峻二

手を漬けて波立ててみる水草かな  
踏台に妻伸び上る雛納め  
思ひ出て棚のちりめんじやこ下ろす  
菜種梅雨題のみ書いて立ち上る  
朧夜や数へつ下りる駅の階  
春の夢覚めて諾ふ船の揺れ  
滑り台啓蟄の地へ足の着く

初 蝶

宮川みね子

春泥の谷中細道迷ひをり  
初蝶の黄は菜の花の匂ひかな  
耳にリボン子犬の付けてクロツカス  
二輪草風にふるへて咲きそむる  
片減りの砥石をみがく鳥曇  
春満月黒猫歩く塀長き  
舌さきに奥歯をさぐる涅槃西風

惜 春

— 佐藤よしい —

夕暮の風の濃くなる木の芽どき  
残生やゆつくり曲る春の川  
旧姓で呼ばれてをりぬ雪間草  
桜餅葉ごと食べよと同窓会  
変りなき生国軒に燕来ぬ  
朧夜に兎生れし声すなり  
草の名を知るも知らずも長閑けしや  
花菜漬母亡きことを今更に  
禅僧に女客きぬ鳥雲へ  
子に何を残さむ軒のつばくらめ

峠越え嫁いで行きぬ花辛夷  
摘みて来し若草風の匂ひする  
畦道にすみれ咲くゆ糸帰郷せり  
だんまりの春の賜ゐて落着けず  
片頬にしばし夕映え雁帰る  
貫かむ俳諧落花手に享けぬ  
初蝶を誘ふ野のものみな低し  
何もかも峠越え来ぬ遅桜  
光陰は竹の一節春惜しむ  
ゆく春のうしろ姿を見てゐたり

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

本尊は一寸八分牡丹の芽  
祓川はらい小流れとなり囀れり  
十三の橋の由来や鳥帰る  
一礼の哲学堂の春シヨール  
スイートピー二重包みとなりにけり

中村 洋子

ものの芽や出城に岩の軍議台  
春塵をかき分け江の電現れし  
下萌えや富士を遠くに鍬洗ふ  
屋根獅子の蹴上げし月の朧かな  
頼朝の追はれし海や磯開き

近藤幸三郎

ぬばたまの蟻の一粒穴を出づ  
鞘堂に鎧重ねの受験絵馬  
暖かや無住寺に僧来るはなし

天野みゆき

つらつらと椿燃ゆなりお七の忌  
目借時己に克つといふ一事

生田 作

音の無き大藪にゐて暖かし  
つばくらやふたたび出遭ふ野の流れ  
春の日へ目高の襖を抱へ出す  
人の声風に乗り来る野火の上  
春障子灯せば届く水の音

高村 令子

菜の花に明るき雨となりゆけり  
春疾風赤く塗られし現在地  
胴塚につづく耳塚春疾風  
青き踏む子に青雲の志  
割り算に余りがありて日脚伸ぶ

◇特別作品◇(抄)

## 春惜しむ

落合 絹代

日本に季語のしらべのさくら咲く  
日の射してゆめ千金の朝ざくら  
水底の花の上ゆく流れかな  
朝夕べ花の機嫌を見てや佇つ  
花の雲川の蛇行にゆだねゐて  
昂然と面を上げて落花浴ぶ  
音もなく雲か霞か夕桜  
鉦彫の薬師を拝し春惜しむ

# 風土独語／神蔵 器



雪割つて太陽に手を貸してをり  
音となる二二月の雨恐れけり

工藤ミネ子

前句は行人抄、後句は鳥啼抄、同一作者の作品である。深刻な内容の句であるが、雪国に生活している者でないと、解りにくいかも知れない。

今年の冬は新潟地方を中心とした日本海側の豪雪は、百十数名の死者が出るほどであったが、作者の五城目あたりも昭和四十八年から四十九年にかけての冬の大雪以来、三十四年ぶりという豪雪であった。その上、さらさらした雪ではなくきわめて重い雪であったので家屋の倒壊など被害が大きくなった。

私たちは先ず掲出句の「雪割つて」に驚かされる。これは雪が止んでも、降りつもった雪は翌朝には氷ってしまふ。ことに地面に近い前に降った雪は、雪というより氷そのもので、固い氷塊のようになっている。

何日かぶりで太陽が顔を出すと、人々は表面の新しい積雪にはスコップや箒の柄を雪に突き差したり、雪を掻きまわしたりする。太陽が少しでも多く当り、また穴をあけるのは太陽と共に風が少しでも深くまで通るようにするためである。まるで子供が遊んで

いるように見えるが雪国の人たちにとっては必死の仕事なのだ。そして地面に近いほど固くなった氷塊化したところは、スコップぐらいでは歯が立たない。鶴嘴やまさかりで雪を割り、割った雪を裏返して太陽に当てる。

「太陽に手を貸す」ということは、そうした人々の働きが、どれだけ雪消しに役立つかということより、そうせずにはいられない雪国に生きる人々の春を待ち望む思いの強さ、せつなさに胸を打たれた。

後句は、私ははじめ二月の雨は、表層雪崩をおこす危険があるので、それを「恐れけり」と言っているものと思つた。しかしそれであつたら二月より三月の雨ということになる。

五城目も二月は一番寒く、降雪量も一番多い。ことに今年のように大雪の年に二月雨は、どう考えても異状としか思えない。そしてこんな年はきまつて夏は冷たい日が続き、日照時間も短く稲作はじめ農作物の冷害に見舞われる。湯田町の「沢内年代記」に見る天明、天保などの飢饉の歴史は雪国に暮している人には決して昔話ではないのだ。(以下略)

# 風土集



# 神蔵器選

炎抜けほむらこぼしぬ君子蘭 秋田

工藤ミネ子

剪定の了へたる樹より空掲ぐ

雪割つて太陽に手を貸してをり

菜の花の息吹き満ちけり濁の村

囀のまりのごとくに移りゆく

湯の中の卵の揺るる黄砂かな 横浜

近藤幸三郎

倒木に届く日差しやはだら雪

師と二人海に語りて卒業す

チューリップあふるる街で別れけり

花の昼時鐘に一礼一打して 岡山

有元 文字

ひたすらに母の打ちたる畑を打つ

春宵や電球替へてさてと座す

進みぐせの柱時計に日永かな

ふるさとの山を称へて卒業す

コーヒーにシナモンステイツク春の雪 東京 林 いつみ

逃水やサラブレッドの運ばるる

須磨寺や春の夕べの濃くありぬ

夕朧青葉の笛の鳴りさうな

東山邸

主亡き魁夷の庭の紅枝垂桜 東京 奥田 弦鬼

兜太先生破顔一笑牡丹の芽

鳥帰るグラバー邸を下に見て

不揃ひの草餅駅の朝の市

春の雪一人で入るロードショウ

物の芽や相続手続終へぬまま 川崎 志村 秀子

山笑ふ父娘Gパン並べ干す

春シヨール手に鈴本の木戸くぐる

国東の山々霞む仏道

昨夜の嵐若布打ち上ぐ由比ヶ浜